

山と博物館

第27巻 第5号

1982年5月25日

大町山岳博物館



春の劔岳

画 柳沢昭夫

劔岳、春スキー

かたくりが薄紫に、こぶしが白く花をつけるころ、山に春がくる。ふなやはんの木は、淡く、黄緑色に芽をふく。春の色は、なにもかも柔らかく、バステルカラー。

豊かな残雪は、まだ、谷や尾根を埋めつくしているが、そこには、冬の寒気とさかまぐり烈風の厳しさはない。多分、暖かい陽光と碧色の空が、高山にも春を運んでくるのだろう。室堂でスキーにシールを張る。雷鳥沢を汗して登る。背には陽光がふりそ、ぐ。たとえあえぎぐの登高であろうと、なんとさわやかで、満ちたりてくるのだろう。春の山では、山に在ることの喜びを、そよ風と陽光がもたらしてくれるのかも知れない。普段の生活の中で失ってしまった、汗することのさわやかさと、春の芽吹き感動を、再び見出す喜びをもたらしてくれる。

劔御前乗越でシールをはずす。ここからの劔はじつにいい。岩と雪の劔岳も、春には、なんと優しさに満ちていることだろう。東山谷で落ちてきているだろう、遠い雪崩の音さえ春雷のようにひびく。

劔沢を滑べる。大きなキャンパスには、大きなシユプールがよく似合う。そよ風になつて雪の大斜面を舞う。

劔沢に天幕を張って、あちこち、滑べるのは楽しい。劔御前の大斜面に、大きな弧を描くのもよからう。急峻な平蔵谷に挑戦するのもよい。八ツ峰で岩登りを楽しんで、長次郎を滑べって帰幕するなんて素敵じゃない。別山から真砂沢を滑べり、はしごだん乗越を経て蔵助から黒部へのコース。劔沢・小黒部谷・片具川コース、あるいは、三の窓雪渓からチンネの登はん、池ノ谷の滑降などは、スケールの大きな大きな山旅の素晴らしさを十分たんのうすることができる。

季節がめぐりて、こぶしの花の咲く頃になると、山へ憧れ、恋いこがれるのは、私ひとりではないだろう。

(文部省登山研修所 柳沢昭夫)

ニホンカモシカと呼び名と語源(続)

北村 嘉宝

本誌第二十五巻 第五号に昭和時代(天然記念物に指定されるまで)を紹介、未完のまま約二年経過しましたが、続編をお届け致します。

新種としては「ケラ・クラシカ・カベシシ

(4) 天然記念物指定後から一九三九年まで昭和九年五月一日(一九三四年)にはカモシカが天然記念物に指定され、世の人々の関心をいっそう深めることになりました。これから紹介する文献は原則として、新しく登場する呼び名だけを抽出することにします。(註:二五巻五号 本報告その1の末尾から10行は本項に含まれるので訂正下さい。)

一九三六年の「旅と伝説」には笹村 浩が「南会津熊狩の話」と題しコシマケを、翌々三八年には武藤鉄城が同誌に「青シシの話」としてケラナ、アオケラ、アノ(大型のアオシシ)、ホノ(中型)を、そしてアオシシは旧二月を過ぎると、そろそろ山を歩きまわるのでマワリシシと呼び、マワリシシはやがてクラ(断崖)に居付くのでクラヅキと呼ぶと紹介しています。(秋田地方)

(5) 一九四〇年代 一九四三年発行の岐阜県吉城郡上宝村々誌にはクランドが紹介されています。

(6) 一九五〇年代 一九五〇年代になると、かなりの数の呼び名が紹介され、半数に達しています。一九五二年の「全獣」には西海富造が「熊

の出る秋」の中で奥羽地方のマタギ言葉としてアオタを、一九五六年〜一九五八年には同誌に白井邦彦が「山村猟師語彙」と題して、ほぼ全国的規模で収集された呼び名を採録しています。



クラ(断崖)にでてきたカモシカ 撮影 浜 昇氏

・クラシ・クロ・クロンボウ・シカ・サトニク・ジシカ・タケニク・ノラシシ・パカシシ・イソ・イソノトリ・クラ・サツベイ・クラマキ・カモシ・イリコ・チヅコ・シツケイ」などです。

「祖母傾自然公園開発報告書」(一九五八年)には、加藤数功が「祖母傾山群における熊の過去帳とかもしか」と題し、ニクノシシ・ケブカ・ケグロ・タンカク(単角)・イッポンツノ(二本角)をあげ、不明確な呼び名としてギユウキを紹介しています。

(7) 一九六〇年代 敦賀市教育委員会編「敦賀半島とかもしか」(一九六一年)には、

早乙女たちの田植歌にききほれるウタシシを、また「会津駒ヶ岳・田代山・帝釈山自然公園学術調査報告」(一九六二年)には羽田健三ほか、

「会津駒ヶ岳周辺におけるカモシカ・クマ・サル」の生活について」と題し「松枝岐地方ではカモシカの子をツムジ、また雌のカモシカをクマン、雄のカモシカをシカゲと呼ぶ。」と紹介しています。

一九六三年には白井邦彦が「動物文学」に「カモシカの方言」と題し、ニワシシ、幼獣名コゾッコを、一九六四年の「岳人」には岸田久吉が「山岳に生き

る動物たち(その二)」の中で、イワ・ダケ・サト・ヤマヒツジ・サンヨウをあげています。同年の「山と博物館」には高橋秀男が、「カモシカを追って」と題し「生まれたばかりのものをトーサイまたはトーゼ、一才の仔をデワッコ、二才をニセッコ、三才仔をサンザイまたはサンゼッコ、四・五才をワカシシ」と記録しています。

「遺伝」(一九六八年)には高橋喜平が、「カモシカの話」に関係文献、北越雪譜を紹介、一九六九年には千葉徳爾が「狩猟伝承研究」に、同年の奈良県教育委員会事務局文化財保存課編「十津川」には、平山敏活郎がウシオニと、その口伝「形、飼牛と同様にして角あり、毛並みは綺麗にして滑か、人を害せず、草木の葉を食いつくすなり。」を紹介しています。

大分県南海部郡の呼び名ニクバカを、同年の「山と博物館」には千葉彬司が、「カモシカ」と題し、「生まれたばかりの幼体をチチ、四年目のカモシカをクラマキあるいはワカジシと呼ぶ地方がある。」とし、また古文獻「風土記」、「拾玉集」を紹介しています。

(8) 一九七〇年代 この時代の文献はカモシカの林木食害問題に関連してカモシカの生活史、分布、密度推定などのほか、森林被害の実態と防除技術などが主流となっていますが、耳新しい呼び名もかなり見受けられます。

一九七〇年の「どうぶつと動物園」には白井邦彦が、「案外ノロマな動物」と題しカラシシを、同年の「ニホンカモシカの調査報告」(岡田弥一郎編)には角田 保が「カモシカセンサス実施の結果」としてアホを、

千葉徳爾の「狩猟伝承研究」(一九七一年)には、カモシカの仔をホノコ、夫婦をアエメ、栃木県編の「動物と植物」(一九七二年)にはクランボ(クランボウ)を、黒川義太郎の「動物談叢」(一九七四年)にはカノシシを、



カモシカのすむ環境(北アルプス)

同年の「みどり」(名古屋宮林局)には大作栄一郎が、「カモシカ撮影行」と題し、裏木曾の呼び名、カモシカを紹介しています。
 一九七四年の「Vulpes」には黒木一男が「宮崎カモシカ調査報告」の中で、一本角シカ・ニクンボウを、一九七六年には「かもしか版2」に角田保が、「カモシカの緊急・恒久対策を練る」と題し、チャチャを、同年の「奥利根地域学術調査報告書」には飯塚正幸ほか、クラップーを、なお体色によって黒青色のものをクロプー、灰色に青味の多いものをアオブー、灰色とアメ色の強いものをアカ

ブー、全体に白味の強いものをシロプーと呼ぶと紹介しています。
 一九七七年には中井一郎が「比良」の中で一本角のニクを、太田雄治の「マタギ」(一九七九年)にはノロ・キラ、受胎しているものをサンゴと記録しています。
 (9) 一九八〇年
 一九八一年の「全狐」に牧野典彦が、
 「犬が吠えたら熊が出た」と題し、オカル・オバケを紹介しています。
 以上の呼び名のほか、文献収集作業を通じてご提供いただいたり、現地でおきさしたりした呼び名は次のとおりです。

三重県熊野市大又地区の呼び名、マヤノシシ・ウシ(国有林作業現場で辻本力太郎氏より)、和歌山小座川、字平丹地区の呼び名、シヤンシヤン・シヤン・シヤンコ(国有林作業現場で作業員の皆さんから)
 群馬県利根郡奥利根地方の呼び名、グラグラ(白井邦彦氏提供)、九州大崩山地域の呼び名、バタバタ



秋田杉の伐根上に立つカモシカ 撮影 浜昇氏

浜昇氏提供)
 不明確な呼び名、ギユウキを除くと、いままでに紹介した数は、前回二十四種、今回八十二種(クラップーの毛色による区分名を除く)で併せて百六種に達しています。
 本稿でとりあげた時代の変遷は、あくまでも文献にあらわれたものを年代順に整理しただけです。現実の変遷とはかなり違っていますのでご承知置き下さい。
 今回は語源の紹介という予定でしたが、すでに本誌、二十六巻八号に、カモシカ考として一〇三種の語源について紹介済みです。
 また、追加種、マワリシシ・アオタ・アノ・ホノについても一部は本誌上で、残りはマ

タギ言葉に属するので重複を避け、表題に忠実ではありませんが、終稿とします。
 (林業専門技術員)

新館開館のお知らせ

5月6日から6月4日まで、新館への移転のため休館しておりましたが、新館は6月5日に開館します。なお、5日、6日の両日は開館を記念して一般に無料開放されます。

ダム湖と崩落 — 高瀬ダムの場合 —

小泉 武栄

夏の暑い日、大都市ではクーラーがフル回転し、電力消費はウナギ昇りに上昇する。こうした電力消費のピークに應ずるため、各地におびただしい数の大火力発電所がつくられてきた。

ところがせっかく発電した電気も夜間には大量に余ってしまう。そこでこの余剰電力をうまく利用しようと考えたのが、揚水式発電所である。これは山間地に二つのダムを設けて電力消費の多い昼間は上のダムから水を落として発電するが、夜間は火力発電所から電気を逆送して下のダムから水をくみ上げ、水を再利用しようというものである。

この方式の発電所は相模川の城山ダムがそ



水位変動によって生じた小崩壊地

の走りであるが、最近では高瀬ダムや梓川につくられた奈川渡ダムを始めとして、大規模な水力発電所はほぼこの方式に変わっている。

この方式のダムは従来のダムと違って一日のダム湖の水位の変化が著しく大きいのが特徴である。高瀬ダムの場合、発電所の完全運転時にはこの水位変動は十メートルにも達するが一日で十メートルも上ったり、下ったりするのである。高瀬ダムの水の受け皿である七倉ダムの場合はさらに大きく二十七メートルにも達する。

このような大きい水位変動は自然状態では発生しえない。似て似たものをあげるとすれば、海岸での満潮、干潮の差だが、これはそれほど大きいものではない。

毎日おこる水位の変動は、ダム湖の湖岸に対して大きな影響を与えると考えられる。たとえば、湖岸部には水位の変動に伴って沈水したり、陸化したりする部分が生ずるが、ここでは地表面は乾湿の変化をくり返すことになるから、岩石の風化や表土の削割が促されるに違いない。また冬ともなれば、水から出た部分はすぐに凍りつき、岩石を凍結によってさらにこわれやすくする。

このように、揚水式発電所のダム湖の湖岸は、巨大な野外実験場ともいえる場をつくり出しており、応用地形学的に興味のあるところとなっている。

筆者らは大町市西方の北アルプス中心部につくられた高瀬ダムについて、一九七八年の湛水開始直後から三年間にわたり、湖岸部に生じた地形変化を追跡調査してきた。その結果、いくつかわかの変化が認められたので紹介し

たい。

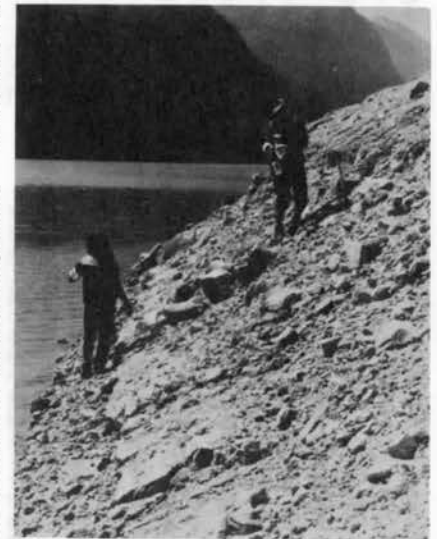
(1) 崩壊地の発生
ダム湖(高瀬湖)の周辺にはもともと多数の崩壊地があったが、新にかなりの数の崩壊地が発生した。これらはもともとあったものに較べるとはるかに小規模であるが、徐々に拡大する傾向をみせている。

崩壊の発生地点を調べると、いずれの場合にも基盤に割れ目が多数入り、岩盤が緩んでいることがわかった。このことから崩壊の発生は、基本的には基盤に原因があり、湛水が誘因となって発生したと考えられる。おそらく一旦水つきになつて緩んだ表土が、水位の低下に伴うひきずりによって崩落したものであろう。

ダム湖の位置するところはもともと高瀬川構造谷とよばれる、地質上の弱線に相当している。そのため至るところに基盤の破碎部が存在する。それが本地域において異常に多く発生した、湖岸崩壊の素因となつたと考えられる。

なおこうした崩壊地からの土砂生産はそれほど多いものではなく、ダムの堆砂に関与する度合は小さい。ただ湖岸がいかにも荒れてみえるため、景観上は問題になりそうである。湖岸が硬い基盤からなり、安定しているところでは、植被がはげれるだけで崩壊は発生しなかつた。

(2) 基盤岩の脆弱化
水位変動で水につかつた基盤岩には、一部でかなりの脆弱化がおこつた。筆者らはシュミットロックハンマーという、簡単な強度試験機を用いて岩石の強度を測定したが、かなりの地点で発現値が減少し、岩石の強度の低下を示した。この低下は全体としての岩盤の緩みや割れ目の開口、表面からの礫の分離な



水位変動によって生じたノッチ (人の立っている平坦なところ)

どとなつてあらわれている。これには水没による凝集力の低下や化学的風化の促進などのほか、やはり冬季における凍結融解のくり返しが大きく効いたと考えられる。

ただこうした基盤岩の脆弱化は、前述の崩壊地の場合と同様、節理の多寡と密接に関連しており、割れ目の少ない一枚岩やコンクリートでは強度の低下はおこらなかつた。この点だけは幸いである。

「ダム湖と崩落」というタイトルから山地崩壊によるダムの堆砂のことを考えられた方も多いと思うが、今回はこれまであまり知られていないと思われる、水位変動に伴う地形変化に重点をおいて紹介した次第である。

(東京学芸大学地理学教室)

山と博物館 第27巻 第5号
発行所 長野県大町市 TEL2(0)211
印刷所 長野県大町市 大町山岳博物館
大町山岳博物館
大町山岳博物館
定価 年額1,200円(送料共) 切手不可
郵便振替口座番号 長野四一三三九三三